

論文の和文要旨

論文題目 中国におけるフェミニズムの成立とその展開
一丁玲の作品活動を中心に

氏名 李宣妮

中国の五・四期は、第一次世界大戦後第一波フェミニズムが世界を席卷していた時期として中国もその影響のもとにあった。実に五・四期は「女性解放」のための多様なスペクトル（古い道徳の批判、教育の平等、相続権、参政権、経済独立、娼妓問題など）が存在していた。それから 70 年余りを経過した現在国家によって一元化された中国の女性の状況との間には大きな落差が存在している。本稿はその落差を説明することを目的として書かれたものである。

第一章では、五・四期の多様な「女性解放論」のなかから、その時期の雑誌、新聞などで繰り返し唱えられた「恋愛論」を扱った。その理由は、「恋愛論」が「女性解放論」として大いに取り上げられただけではなく、当時の青年たちをただ観念の変革にとどめず、社会の変革を自分の身の問題として実感させ、果敢な行動へと直接結びつけた問題だからである。「恋愛」は伝統的な家族制度の批判や婚姻の自由と密接な関係を持っており、当時の近代思想として注目を浴びた。「恋愛論」に刺激された青年男女は、特に若い女性たちは親によって取り決められた婚姻を拒否し、自殺や家出した。こうしたテーマは新聞、雑誌の論説、文学に溢れた。「恋愛」の自由を求め、家出をすることは、伝統的な家族制度からの個の解放を意味し、古い家族制度のなかで最も苦しめられた女性の解放に直結された。しかし、フェミニズムの観点から五・四期盛んに主張された「恋愛論」を読み直してみると、そこには二つの顔（解放的な面と隷属的な面）があることが分かる。それを分析することは、「近代」が女性をいかに取り込み、再編成しようとしたのかを明らかにすることができる。そのために本稿では五・四期の代表的な啓蒙雑誌『新青年』と女性雑誌『婦女雑誌』で繰り広げられた「恋愛論」を分析した。

五・四期の「女性解放論」、特に「恋愛」の自由を求めて家出した女性たちが 20 年代後半になると、自分たちにおかれた現実を直視し、そのなかでフェミニズムを誕生させるようになる。第二章からは五・四期以降生まれた近代中国のフェミニズムを考察するために小説家丁玲に注目した。丁玲を選んだのは、最初あげた本稿の目的、つまり五・四期を背景にして生まれてきたフェミニズムから、現在国家によって一元化された中国の女性の状況との間にある落差を説明するために最も適しているテーマだと思われるからである。

フェミニズムの観点をもって丁玲の作品を分析していくと、初期、中期、後期の三つの時期に分けられる。第二章では、丁玲の生い立ちを全体的に考察したものである。

第三章では、初期の作品を主に分析した。丁玲の初期作品は発表当初からフェミニズ

ム的な性格については論じられてきたが、丁玲が感じ取った問題の実体については明らかにされないままだった。丁玲が作品化したテーマを分析するためには、フェミニズムが理論化してきた、近代社会が持っている女性差別性を理解せずには不可能である。例えば、「近代家父長制」、「女性の商品化」、「娼婦差別」、男女によって異なる二重基準などがそれである。このような理論の枠組みをもって初期作品を読み直すと、丁玲は1970年代に至ってやっと問題化された近代社会の女性差別性を、生まれつつある「近代社会」から問題化した優れた感性の所有者だったことが分かる。そして1929年と1930年にかけて書いた作品は、「女性主義の消失」あるいは「革命の誕生」といったような図式をもって理解され、その時点で丁玲の関心が「女」から「革命」へ転換したとみている。しかし、私は、この時点で見せている変化を国家や民族の危機に遭遇した丁玲が取った「生き残り戦略」として読んだ。つまり、帝国主義によってもたらされた中国の危機の前で、中国の成員としての忠誠を表すことによって女性解放を試みるのである。それは言い換えると、女性の「国民化」を選んだといえる。

第四章では、中期（延安時期）の作品を政治的な状況と照らしながら考察した。先行研究の中では、1930年頃に「革命文学」へ転換したと理解されることによって制約を受けている。そして中国では、丁玲の作品が、プチブル的自己解放を求めた女性（莎菲）から、社会主義の戦士として自己改造を遂げた女性（陳老太、貞貞）の描写へ変化し、社会主義革命を阻害する「封建残滓」を問題化したとみる。この際社会主義革命によって女性解放は自然に達成されるものだから、重要なのは社会主義革命であって、女性解放ではない。だから丁玲も女性解放を唱えたというより、社会主義革命の達成のために「封建的な意識」を取り除こうとしたと理解される。または、延安時期の一時的な知識人視点の復活に伴い、丁玲にも女性視点の復活がみられるが、完全な形態として蘇ることはなかったという。日本の江上幸子は、フェミニズムの観点から戦時強姦に晒された中国女性たちが、儒教的イデオロギーによって生じる二次的被害について問題化したということを明らかにしている。が、南京時代（国民党によって軟禁された33年から36年までの時期）の出産経験と延安時期の作品を強く結びつけることによって丁玲作品がもっているもっと広い問題意識を見逃しているように思われる。欧米での研究は、早くからフェミニストとして丁玲を理解しようとする研究がなされてきた。1980年パリで開かれた中国抗戦文学討論会で発表された『『三八節有感』と作品の中に表現された丁玲のフェミニズム』は、丁玲作品（初期、中期）をフェミニズムから一貫して分析している。が、発表者・白露は、農村に根をおいた家族制度が女性に自我を備えることさえ難しくしていたと述べた。延安時期作品もこうした伝統的な家族制度との衝突として理解しているので、国家や民族とフェミニズムの錯綜した関係を説明できない限界もっている。また欧米では、「三八節有感」がフェミニズムとマルクス主義の対立の産物として理解され、ことにジョンソンは戦時と経済的な危機のなかでフェミニストたちの要求が後回しされるか、偏狭な主張であると批判されたことに対して、丁玲が延安社会を批判する作品を書いたと論じている。ジョンソンの研究は延安時期の丁玲作品の理解に示唆するところが大きい。本稿ではこのような問題を批判、継承しながら延安時期

の作品を分析した。この際ギアーツの「文化論」、アンダソンの「ナショナリズム論」、西川の「国民国家論」、上野千鶴子の「女性の国民化論」に大きくヒントを得た。

民族・階級集団である共産党の中でジェンダーを問題化することによって丁玲の主張は利敵視された。その批判は「整風運動」という思想静粛運動の中で行われたが、第五章では、利適されざるを得なかった歴史的な背景について述べた。それはフェミニズムから見た「整風運動」を政治、軍事的な面から改めて読み直し、「女性の国民化」を選んだフェミニズムのジレンマを述べた。

結論では、河南省鄭州大学の李小江を中心とした自主的なフェミニズムグループの活動と、95年北京で開かれた世界女性会議をめぐって国家とフェミニズムグループの間に生じた葛藤を扱った。現代中国フェミニズムが抱えている最も深刻な問題は国家権力からどれだけ自由に自らの問題を自らが語り、自ら解決の道を探せるかにかかっていると思われる。国家権力とフェミニズムの錯綜した関係は、延安時期のフェミニズムと党との関係からはじめられたものである。1920年代に中国でフェミニズムが成立してからその後の道程を理解することは、現在のフェミニズムの問題を解決するカギになり得るのではないかというのが本稿の結論だといえる。

現代中国政治の特徴についての研究へさらに進まない、フェミニズムと国家という課題をもっと完全な形として論じることができないなど、本稿は大きな課題を残している。それにこれから丁玲本人の日記などが発刊させる予定であるという話を聞いている。丁玲の日記が発刊されると、権力の核心に最も近くにおいて、なおフェミニストであった丁玲が感じ取った政治や社会、文化に関する問題意識がより明らかにされるだろう。こうした問題点を本稿が抱えていることを認めながらも、本稿が五・四期の代表的な「女性解放論」を踏まえ、文学家としての丁玲ではなく、フェミニストとして定位しようとしたアプローチから近代中国フェミニズムの道程を明らかにしたことや、現代中国が抱えているフェミニズムの問題まで統括して論じた最初の論文ではないかと思う。